

【公募論文】

フィヒテの『新しい方法による知識学』における衝動の機能

櫻井真文

はじめに

I・カントが自らの哲学を超越論的として規定して以来、「主観性の統一」としての理論理性と実践理性の総合がしばしば問題とされてきた。カントはこの問題に対する一つの解答として、『実践理性批判』では「純粹実践理性の優位 (Primat der reinen praktischen Vernunft)」に言及した。この用語が意味するのは、実践理性に属する「関心 (Interesse)」⁽³⁾ が理論理性に属する関心に対して優位を占めるということである。すなわち、人間の全ての関心が最終的には実践的であるということ⁽⁴⁾ を根拠に、カントは理論理性と実践理性の総合を主張したのである。だが、このようなカントの解答は、両理性を総合する「実践的関心」の根拠が不明瞭であるという問題を新たに残すこととなった。そこでJ・G・フィヒテは、カントの「実践理性の優位」という思想を更に推し進め、人間の実践的行為の根拠に存する衝動についての理論を主題化した。フィヒテは最初の主著である『全知識学の基礎 (Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre)』⁽⁵⁾ (二七九四／九五年、以下『基礎』と略記) の実践的部門において、絶対我と知性我の総合根拠が自我の実践的行為としての「努力」であることを明らかにした後、「努力」の概念を詳細に規定する過程において

衝動論を叙述している。この点において、理論と実践の根源的な総合根拠をフィヒテは衝動の概念に求めたと見なすこともできよう。さらにそうした見通しを採用することではじめて、衝動が「憧憬の感情」を媒介として努力になるという生成的關係を見出し、「調和を目指す衝動」である「憧憬 (Sehnen)」が行為の可能性の最たる制約であることを解明することができる。⁽⁶⁾しかしフィヒテは『基礎』において、その叙述を完成させることができなかつたがゆえに、知識学における衝動の機能を明示するまでは至らなかつたのである。

そこで本論考では、イエーナ期知識学の改良された叙述である『新しい方法による知識学 (Wissenschaftslehre nova methodo)』⁽⁷⁾(一七九八／九九年、以下『新方法』と略記)を取り上げ、そこに見出される一層詳細な衝動論の解明を試みる。『新方法』の衝動論を解明し、知識学における衝動の機能を明示することで、行為の意識における理論的活動と実践的活動の關係について一層の理解を得ることができらるであろう。なお本論考では『新方法』の中でも、自我の根源が探究される第一講から第十三講までを取り上げる。相互主観性理論が主題となる第十四講以降において、自我の内にある衝動が詳細に論じられることはないからである。

論述は以下の手順で行う。第一節では、『基礎』の衝動論との関連を明確にするために、「衝動」及び「感情」が『新方法』においていかに定義されているのかを確認した上で、感情が行為に移行する際の観念的活動の働きを説明する。第二節では、フィヒテが観念的活動の説明根拠として提示する「反省への衝動」に言及した上で、意識の成立過程における「変化の原理」の役割を考察する。第三節では、『新方法』において新たに導入される「意志活動」の働きを解明することを通して、『新方法』における衝動の機能を一層明らかにする。

第一節 衝動と感情

フィヒテは『新方法』において、『基礎』の叙述方法に不備があったことを自覚した上で、知識学を叙述する際の「新たな方法」を導入した。その方法とは、個体我の脱個体化と絶対我の個体化の過程を現象学的手法により説明するという方法である。⁽⁸⁾ フィヒテは『新方法』において、もはや『基礎』のように三根本命題を定立し、対立、総合の弁証法的構造を展開することはない。『新方法』の叙述は有限的自我の意識構造を分析することから出発するのであり、『新方法』の前半部分では、自我における自己限定としての「實在的活動 (reale Tätigkeit)」と自己直観としての「観念的活動 (ideale Tätigkeit)」の関係を説明するという仕方であり、意識構造の根源が探究されていくのである (46)。そして『新方法』の「衝動」及び「感情」という用語は、これらの両活動の関係を一層詳しく説明する際に導入される。以下で順に説明していこう。

まずフィヒテは『新方法』の第六講において、實在的活動と観念的活動という二つの働きから自我の有意的行為が構成されていることを確認することで、「行為 (Handeln)」の本質規定である「活動 (Tätigkeit)」を際立たせ、行為と活動を区別する (66)。次にフィヒテはこの区別を踏まえた上で、「衝動 (Trieb)」を「行為ではない活動」、「対立を除去しようとする、内的に持続する傾向」として規定する (66)。つまり、衝動とは自我において持続する行為への傾向である。さて「衝動」をこのように規定することにより、行為以前の状態である衝動がいかに行為へと至るのか、という問題が生じる。衝動とは自我の実践的活動が押し留められた状態である。フィヒテは、このような衝動を「押さえつけられたバネがもつ傾向 (Tendenz einer gedrückten Stahlfeder)」 (66) に例えている。そうした衝動が

押し留められた状態を脱して行為になる際、さしあたり衝動の状態から被制限性への移行がなされる。というのも、フィヒテに従えば、行為が押し留められ制限されているという意識に基づいてのみ、自我の行為は可能となるからである。さらに衝動はまだ実践的活動ではないがゆえに、この被制限性への移行において残された自我の活動は観念的活動しかない。フィヒテは、衝動から被制限性への移行において働くこの観念的活動を「衝動の意識 (Bewusstsein des Triebes)」(67)と呼ぶ。この意識は、活動の意識ではなく、「被制限性の意識 (Bewusstsein der Beschränktheit)」(67)であるがゆえに、ただ「感情 (Gefühl)」(68)としてのみ自我に現れる、とフィヒテは考えるのである。

それでは『新方法』において感情とはいかなるものか。フィヒテに従えば、感情とは、そのうちで活動と受動が合一された意識のことである。「感情において、活動と受動は合一されている」(68)。詳言すれば、感情では、行為になろうとする活動と未だ行為ではないという被制限性が合一されている。このように衝動は常に感情において意識されており、自我はこの意識以前に立ち返ることができない。それゆえフィヒテは、「感情は事実において、第一に根源的なものである」(68)と述べるのである。さて衝動と感情の違いを挙げるとすれば、その違いは、感情は意識であり、その意識はさらに意識されうるといふ点にある。私たちは、行為への傾向としての衝動そのものを意識することはできないが、自我の被制限性を意識することはできる。換言すれば、共に行為以前のものである衝動と感情の内、自我が実際に意識することができるのは感情だけなのである。それでは、このような感情と行為はいかなる関係の下にあるのか。フィヒテに従えば、感情とは「自我全体がもつ被制限性や被限定性」(69)であり、自我はこの感情を越えていくことはできない。感情とは「最終的な限界」(69)であり、そうした感情によって一定の限界内における何らかの行為の可能性が自我に与えられる。この点において、行為とは感情によって制約されているものであり、感情とは行為の「素材 (Stoff)」(65)である、とフィヒテは考えるのである。なお、『新方法』の第六講におい

て定義される「感情」と、私たちが日常的に用いる「感情」が異なるものであることは注意しておきたい。私たちが日常的に「このリングを甘いと感じる」と述べるとき、そこには感情作用のみならず観念的活動も共に働いている。というのも、このリングを甘いと感じるためには、他のリングを食べた際の感情との比較が不可欠であり、また「このリングを食べているのは私である」という自己直観も不可欠だからである。それに対して、『新方法』の第六講における感情とは、明確な意識へと高められる以前の意識であり、自我の意識構造を分析する過程で見出されるものである。ここでフィヒテは、自我がもつ直接的な「被制限性の意識」を表現するために、「感情」という用語を使用しているのである。

以上が、『新方法』における「衝動」と「感情」の定義である。これらの定義より、衝動は感情へ移行し、感情は行為へ移行するという関係が明らかとなる。すなわち『新方法』の衝動論は、感情を媒介とした衝動から行為への移行を問題としているのである。それゆえ『新方法』の衝動論は、衝動が感情を媒介として努力になるという生成的関係を提示した『基礎』の衝動論を引き継いでいると言えるであろう。それでは『新方法』において、『基礎』で十分に説明されることのなかった、感情から行為への移行はいかに説明されているのか。フィヒテはこの移行を説明するため、感情における観念的活動の働きに着目する。その観念的活動は、感情からの「もぎ離し」(das Losreißen) (81) を行う活動である。すなわち、自我は自らの観念的活動を通じて「私は制限されたとして感じている」状態から自己をもぎ離すことで、感情から行為への移行を可能にするのである。さらにこのもぎ離しは、自我の実在的活動が制限されるやいなや、絶対的に行われる。というのも、フィヒテに従えば、感情における観念的活動は「自我の絶対的活動 (die absolute Tätigkeit des Ich)」(79) だからである。自我が感情の状態に陥るやいなや、観念的活動は絶対的に「いかなる根拠に基づくこともなく (aus keinem Grund)」(79) 自らを外化させ、感情を意識するという仕方

で、自我を感情から行為へと移行させるのである。

第二節 「反省への衝動」と「変化の原理」

前節の考察により、『新方法』の衝動論が『基礎』の衝動論を引き継いでいることが確認されると共に、感情において観念的活動が働くことで、自我は感情からもぎ離されることが明らかとなった。本節では『新方法』の衝動論で新たに登場する「反省への衝動」と「変化の原理」という二つの衝動を取り上げ、衝動の更なる機能を明らかにする。第一に取り上げるのは、「反省への衝動 (ein Trieb zur REFLEXION)」（79）である。フィヒテに従えば、この衝動は自我の本性に属するものであり、感情における観念的活動の説明根拠として導入される。フィヒテは『新方法』において、一方で観念的活動の外化が根拠を持たない「自我の絶対的活動」であることを明言しながらも、他方で観念的活動の説明根拠という役割を「反省への衝動」に認めるのである。以下の議論のために、この反省が自我の構造に備わる働きであることを考慮して、ここでなされている反省を「構造的反省」と表記し、「反省への衝動」を「構造的反省への衝動」と呼ぼう。⁽¹⁾さて、「構造的反省への衝動」に言及することにより、『新方法』における衝動の一つの機能が明確となった。『新方法』に従えば、衝動は観念的活動の説明根拠として想定されるのである。とはいえ、衝動は観念的活動を単に説明するための根拠にすぎないのか。以下では第八講で登場する「変化の原理」に関する理解を深めることで、衝動の更なる機能を考察していこう。

第八講において問題となるのは、「感情の多様 (ein Mannigfaltiges des Gefühls)」（88）である。私たちは通常、自身の内には様々な感情があることを認識している。しかし私たちは、様々な感情を一挙に感じることはできず、その都

度特定の感情を持つのみである。「一つの感情は、一つの限定された被制限性である (ein Gefühl ist eine bestimmte Beschränktheit)」(88)。それでは、自我はいかにして感情の多様性を持ちうるのか。さしあたりフィヒテに従えば、感情がそもそも変化するという特徴を持っていなければ、私たちは多様な感情を持つことはできない。「そのような多様なものは、感じる者の状態の変化を通じてのみ考えられうる」(88)。私たちは動物や植物と同様に、「変化の原理 (Prinzip zur Veränderung)」(88) を持つ。なお私たちは目下の感情が以前の感情とは異なるということ根拠に、感情を変化させる原理の存在を想定することはできるが、しかし変化への傾向としての「変化の原理」そのものを実際に意識することはできない。それゆえ「私たちの本性の内 (in unserer Wesen)」(88) にすでにありながらも、感情の変化を媒介としてしか見出されることのない「変化の原理」は、衝動の一種であると考えられる。ところで、このような変化の原理も現時点では、行為を説明するための「仮説的妥当性 (hypothetische Gültigkeit)」(88) を持つにすぎない。そこでフィヒテは、変化の原理が単なる仮説以上のものとなるための条件を提示することで、この原理の仮説的性格を取り除こうとする。「そのような仮定によってしか、または、そのような仮定なしには意識を説明できないということが示されたならば、そのとき私はそのような仮定を定言的に要請する権利をもつであろう」(88)。フィヒテに従えば、変化の原理を定言的に要求する権利が得られるか否かは、変化の原理という仮定のもとで意識の成立過程を説明し、その原理なしには意識が成立不可能であることを示すことにかかっている。それでは、変化の原理を仮定することで、意識の成立過程はいかにして説明されるのか。

さしあたり出発点となるのは、自我の実践的活動が制限されている状態であり、自我が制限性のみを感じている状態である。これは、自我にとつて事実に第一のものである「被制限性の感情」の状態である。しかし、感情は被制限性のみで構成されているのではない。というのも、感情は常に何らかの変化の結果であり、変化の原理が感情のう

ちになければ、新たな感情が生じることはないからである。「この制限は、この感情の状態において生じた変化によつて、再び制限されている」(98)。この場合、被制限性を超えていこうとする努力が変化の原理と考えられる。それゆえ被制限性の感情には「努力の感情 (Gefühl des Strebens)」(84) が伴うとフィヒテは考える。自我は事実に、「被制限性の感情」と「努力の感情」が合一された状態にある。次に、この状態において「構造的反省への衝動」が満たされることにより、構造的反省が外化する。自我は構造的反省を通じて、感情を反省することもしないこともある⁽⁹²⁾。しかし構造的反省がもつ自由は、制限付きの自由でしかない。すなわち構造的反省は、感情を反省するかしないかは自由であるが、その場合、構造上この感情以外のものを反省することはできないという制限性を持つのである。ともあれ、感情に構造的反省が加わることで、自我Xについての意識が生じる。フィヒテはこの意識を「直観X」(98)と呼ぶ。しかし、ひとたび構造的反省が起こると自我は、Xとは区別される何らかのYを被制限性の根拠として想定する「直観Y」(99)を持つことになる。自我が「被制限性の感情」を反省する場合、自我は直観Yにおいて現実的客観である「もの (Ding)」(83) を被制限性の根拠として見出し、それに対して「努力の感情」を反省する場合、自我は可能的客観である「理想 (Ideal)」(85) を被制限性の根拠として見出す。つまり自我は直観Yにおいて、「もの」ないし「理想」を客観として持つのである。さて、ここでの自我は自己から区別される客観を直観しており、対象に関する意識を持つ。さらに、この自我は対象意識を持つものとしての、自己自身を直観する。「私は、直観するとして私を直観する。これを通じて、私は私自身に対して私となる」(99)。すなわち、自我は直観Yの段階にまで至つてはじめて、自己から区別される客観との対比により、自己自身を明確に意識することができる⁽⁹³⁾。

以上のようにして、意識の成立過程が説明されると共に、その際の「変化の原理」の役割が明らかにされた。変化

の原理は、自我にとって事実的に第一のものである「被制限性の感情」に「努力の感情」を付加するという役割を担っている。仮に変化の原理が仮定されなければ、「努力の感情」が現れることはなく、それゆえ自我は「被制限性の感情」に留まり続けてしまうであろう。さてフイヒテに従えば、変化の原理という仮定を用いて意識を説明した現在、変化の原理はもはや「仮説的妥当性」を持つに留まるものではない。「私たちが上で蓋然的に想定した、諸々の感情間の交替は、それゆえ必然的に想定されなければならない」(96)。いまや私達は、「それ〔変化の原理という仮定〕を定言的に要請する権利 (das Recht, sie kategorisch zu postulieren)」(88、亀甲括弧内は筆者による補足)を持つ。換言すれば、私達は変化の原理を意識の可能性の制約として、実践的に想定することができる。変化の原理は、意識の説明根拠としてだけでなく、意識の可能性の制約として端的に要請されるのである。

第三節 意志活動と思惟

前節の考察の結果、衝動は「構造的反省への衝動」としては観念的活動の説明根拠として想定されること、「変化の原理」としては意識の成立過程において不可欠であるという意味において、意識の可能性の制約であることが明らかとなった。『新方法』の議論に従えば、衝動は「変化の原理」としては単なる仮説に留まるものではなく、意識の可能性の制約として定言的に要請されるものである。したがって、私達は衝動を理論的かつ実践的に要請する権利をもつのであり、ここに衝動を前提として議論を行うための確かな土台が獲得されたと言えるであろう。ところでフイヒテは『新方法』で自我の根源を説明する際、衝動のみを自我の本質とするのではなく、自我の「意志 (Wille)」(127)の働きにも言及している。この「意志」という概念は、第十四講以降で登場する相互主観性理論において中心

となる概念である。⁽¹⁵⁾ それでは、自我の意識構造において意志はいかなる役割を担っているのか。以下では、『新方法』の第十二講で登場する「意志活動 (das Wollen)」(123) の働きを説明しよう。⁽¹⁶⁾

フィヒテは「意志活動」の働きを説明する際、まず自我が「熟慮 (das Delibrieren)」(123) している状態を出発点とする。熟慮とは観念的活動に属する働きであり、実際に行為するに先立ち、これからなしうる複数の可能的行為を予め構想する働きである。「熟慮する際、行為の概念は幾つもの行為の間を揺動しており、また特定の行為に固定されてはいない」(123)。この点において、私たちは熟慮を行為の可能性の制約と見なすことができる。しかしフィヒテに従えば、可能的行為を単に構想するだけでは、可能的行為から実際の行為への移行が生じることはない。行為が実際に成立するためには、複数の可能的行為から一つを選び取るよう「決意する (einen Entschluß fassen)」(123) 必要がある。それでは、自我はいかにして決意するのか。ここで登場するのが、自我の實在的活動の働きに属する、意志活動の働きである。意志活動は自我の「第一の内的な力 (die erste innere Kraft)」(127) であり、実際の行為の成立に際して絶対的に要請される。「意志活動は、現実性の定言的要求、ないし現実性の絶対的要請 (ein absolutes Postulat an die Wirklichkeit) として現れる」(123)。そして絶対的に現実性を要請された意志活動は、熟慮において分散している努力の方向を一点へと「集中 (die Konzentration)」(124) させる。換言すれば、意志活動が熟慮している自我において働くことにより、自我は一つの行為を選択するよう決意するのである。仮に熟慮に意志活動が伴わなければ、その際の熟慮は単なる「願望 (Wunsch)」(125) でしかなく、決して実際の行為へと至ることはない。すなわち、意志活動は自我が熟慮から決意へと移行するために不可欠であり、それゆえ意志活動もまた行為の可能性の制約なのである。

以上より、熟慮と意志活動が共に行為の可能性の制約であることが明らかとなった。次にフィヒテは熟慮と意志活

動を共に「思惟 (das Denken)」(124) の一種と見なすことにより、両活動の特徴を更に説明していく。フイヒテに從えば、熟慮は「蓋然的な思惟 (das problematische Denken)」(124) である。というのも、熟慮とは行為の可能性のみを思惟する活動であり、どの行為を選択するかは任意の判断に委ねられているからである。なおフイヒテが『新方法』で「思惟」という言葉を用いる際、通常はこの「蓋然的思惟」が念頭に置かれている。それに対して、意志活動は「限定された思惟 (das bestimmte Denken)」(124) である。というのも、意志活動は実際の行為が成立する以前の思惟において現れるものであり、それは自我の努力を一点へと限定する働きだからである。ここで注目すべきは、フイヒテが熟慮のみならず、意志活動もまた思惟の一種と捉えている点である。『新方法』では、意志活動と思惟の関係が不可分なものとして規定される。「私は私を意志するとして思惟する限りで、私は意志する。また、私は意志する限りで、私は私を意志するとして思惟する。両者は不可分である」(124)。意志するだけでは可能的行為が現れることはなく、思惟するだけでは行為は実現することはない。すなわち、意志と思惟の協働に基づくことにより、自我の行為は成立しているのである。

以上のようにして、『新方法』の意志活動は特定の行為へと決意する働きであり、思惟と共に働くことで自我の行為を成立させていることが解明された。それでは、なぜフイヒテは『新方法』において衝動のみならず、意志の働きに言及したのだろうか。その理由としては、自我の有意的行為がもつ実践的性格を「衝動」概念だけでは説明し尽くせないことが考えられるであろう。第二節で明らかにされたように、たしかに衝動は意識の可能性の制約として、定言的に要請される。しかし行為以前の衝動があるだけでは、行為が成立することはない。自我が実際に行為するためには、特定の行為へと決意する意志の働きが不可欠である。フイヒテは『新方法』で行為の根底において働く「意志」に言及することにより、「調和を目指す衝動」としての「憧憬」を行為の可能性の最たる制約とする『基礎』の

衝動論を修正すると共に、意志と思惟の協働に基づいてはじめて行為が成立することを明示したのである。⁽⁴⁷⁾

おわりに

本論考では、『新方法』における衝動の機能を説明するため、『新方法』の衝動論と意志活動に関する理解を深めてきた。その結果、『新方法』の衝動論が『基礎』の衝動論を引き継いでおり、感情を媒介とした衝動から行為への移行を問題としていること、『新方法』の衝動は「構造的反省への衝動」としては自我の観念的活動の説明根拠であり、「変化の原理」としては自我の意識の可能性の制約として定言的に要請されるものであること、『新方法』で新たに導入された意志活動は自我の行為の一層根源的な働きであることが明らかとなった。すなわち、衝動論は『新方法』において、自我の意識の可能性の制約を明示するという位置を占めてはいるものの、自我の行為を成立せしめる働きの説明は『新方法』の意志論へと受け継がれたのである。それゆえ『基礎』の実践的部門の読解から獲得された、理論と実践の根源的な総合根拠をフィヒテが「衝動」概念に求めたという見解は、『新方法』においてもはや妥当しないと言えるであろう。しかし本論考では、『新方法』における「意志活動」の働きの説明を通じて、可能的行為の構想である熟慮としての「思惟」と、特定の行為へと決意する「意志」が共に働くことで初めて、可能的行為から一つを選択した結果としての行為が成立することが明らかにされた。端的に示せば、あらゆる人間の行為の成立根拠は意志と思惟の協働の内に見出されるのである。それゆえ、自我における理論と実践の根源的な総合根拠は、意志と思惟の協働を説明することで得られる、という見通しを立てることができるであろう。ただし、このような意志と思惟の協働の一層詳細な構造を説明するためには、経験的世界における意志活動の根拠としてフィヒテが想定した、「純粹意

志 (reiner Wille) (142) の働きを明らかにすると共に、純粹意志が経験的意志へ感性化される仕方を明示する必要がある。このことに関しては、純粹意志と経験的意志の連関が詳述されている『新方法』の第十四講以降の考察を通じて、改めて検討したい。

註

- (1) 「主観性の統一 (Einheit der Subjektivität)」は、超越論的構想力を感性と悟性に共通の「知られざる根」として把握せんとするハイデガーのカント解釈が、感性と悟性の合一を認識の出発点とするカント自身の考えに的中してゐないということを通じて、D. Henrich がその批判の要点を示すために用いた表現である。Vgl. D. Henrich, Über die Einheit der Subjektivität, in: *Philosophische Rundschau*, Bd.3 (1955), S.46-48.
- (2) Vgl. I. Kant, *Kritik der praktischen Vernunft*, hrsg. von H. D. Brandt und H. F. Klemme, PhB 506, Hamburg 2003, S.161-164. Vgl., *ibid.*, S.164.
- (3) カントの「実践理性の優位」を理解するにあたり、次の研究に多くの示唆を与えられた。Vgl. D. Breazeale, Die systematische Funktion des Praktischen bei Fichte und dessen systematische Vieldeutigkeit, in: H. G. Manz und G. Zöllner (hrsg.), *Fichtes praktische Philosophie. Eine systematische Einführung*, Hildesheim 2006, S.39-72.
- (4) Breazeale は、カントの場合の実践理性の優位とは、実践理性が理論理性に対して優位を占めることではなく、人間の生における実践的関心が理論的関心に対して優位を占めることを意味する、と指摘している (S.65)。
- (5) J. G. Fichte, *Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre*, 1794/95, In: *Gesamt- ausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, hrsg. von R. Lauth, H. Jacobs, Stuttgart-Bad Cannstatt 1965, (GA12), 木村素衛訳『全知識学の基礎 (全二冊)』岩波文庫、一九四九年。隈元忠敬訳『全知識学の基礎』(『フイヒテ全集』第四卷)、哲書房、一九九七年。なお、アカデミー版からの引用と参照に際しては、略号 (GA)、系列数・巻数、頁数の順に記す。
- (6) Vgl., GA 12, 421-451. なおフイヒテの「憧憬」概念に関する研究としては、次のものが挙げられる。Vgl., A. Soller, *Trieb und Reflexion in Fichtes Jener Philosophie*, Würzburg 1984, S.60-66.

- (7) J. G. Fichte, *Wissenschaftslehre nova methodo*, 1798/99, Nachschrift K. Chr. Krause, hrsg. von E. Fuchs, PhB 336, 2. Auflage, Hamburg 1994; *Foundations of Transcendental Philosophy nova methodo* (1796/99), translated and edited by D. Breazeale, Cornell University Press 1992; *La Doctrine de la Science Nova Methodo, suivi de Essai d'une Nouvelle Présentation de la Doctrine de la Science*, Trans and ed. I. Radtzzani, Lausanne: Editions de l'Age d'Homme, 1989.
- この PhB の第二版は、Breazeale の英訳 (1992) と Radtzzani の仏訳 (1989) を踏まえ、Fuchs が初版 (1982) に文献学上の修正を加えたものである。それゆえ本論文では、第二版を一層正確なテキストとして採用する。なお、『新方法』からの引用と参照に際しては本文中に該当箇所頁数を記す。また翻訳に関しては、Breazeale の英訳を適宜参照した。
- (8) 藤澤賢一郎、千田義光共訳『新しい方法』において採用されているかを考察するにあたり、次の研究に多くの示唆を与えられた。藤澤賢一郎、千田義光共訳『新たな方法による知識学』(『フィヒテ全集』第七巻) 解説、哲書房、一九九九年、五一—五二六頁。この解説において、『新方法』の前半部では現象学的な仕方得意識的分析がなされているという指摘がなされている(五二—五三頁参照)。
- また、『新方法』の『基礎』に対する叙述方法と叙述内容の優位性を考察するにあたり、次の研究に多くの示唆を与えられた。Vgl. G. Zöllner, *Fichte lesen*, Stuttgart – Bad Cannstatt 2013. Zöllner は『新方法』をイエーナ期知識学の最も完全なテキストと見なしており、「初期の完成した哲学体系」という評価を下している (VII)。Zöllner に従えば、『新方法』は『基礎』に対して、現象学的手法を用いて自我の意識構造を説明しているという点で叙述方法の優位を持つだけでなく、自我の意識構造を意志論の枠組みの中で捉え直しているという点で内容的な優位も持つ (S.25 und 29f.)。
- (9) イエーナ期知識学における「感情」の動きを理解するにあたり、次の研究に多くの示唆を与えられた。Vgl. D. Breazeale, *Thinking Through Wissenschaftslehre*, Oxford 2013, S.156–196. Breazeale は『基礎』の「障害 (Anstöß)」が「感情」として定義し直されていることを指摘しており、自我の根源的制限である「感情」が行為の可能性の制約であることを明示している。このような解釈を採用することで、フィヒテがイエーナ期知識学において自我の行為そのものからは導出不可能な、自我の「被制限性」の根拠の解明を試みていることが明確となるであろう。
- (10) 『基礎』の第七定理では、感情が努力へと移行する際に、憧憬に基づく観念的活動が働くことが示されており、フィヒテはこの観念的活動を「限定」、「変容」、「模写」、「直観」という用語に換言した上で、それぞれの活動に関する説明を行っている。しかし、各活動に関する説明は決して精緻なものであるとは言えず、また、どの活動がここでの観念的活動の役

- (11) 割を最も明確に示しているのは、「基礎」の叙述からだだけでは判断し難い。Vgl. GA II/2, 430-446. 『新方法』のテクストにおいて、通常表記の Reflexion (reflektieren) と小型英大文字表記の REFLEXION (REFLEKTIEREN) は意図的に使い分けられている。前者の反省は、主に行為との関係における現実的反省を示す際に登場する。後者の小型英大文字の反省は、「衝動」や「感情」といった、行為以前のものととの関係における反省を示す際に登場する。さて、この二種類の反省を区別する際、Janke の指摘が参考になる。Janke は反省を、哲学者の技巧としての反省と、自我の構造において不可欠な反省の二種類に大別し、前者の契機を後者に見出した。この Janke の区別を採用すれば、小型英大文字の REFLEXION は自我の構造に含まれているため、後者の反省に該当すると考えられる。そこで本論考では小型英大文字の反省に対して、「構造的反省」という訳語を採用した。Vgl. W. Janke, *Fichte. Sein und Reflexion*, Berlin 1970, S.7-26. また『新方法』全体の文脈から REFLEXION の内実を読み取り、知識学における REFLEXION の意義を確定することは、これからの研究上の課題としたい。
- (12) Diese Beschränkung ist wieder beschränkt durch die im Zustande des Gefühls vorgegangene Veränderung; auf diese kann ich REFLEKTIEREN oder nicht. (98) とする箇所の上から始まる文を、Breazale は「私は変化を構造上反省する(この)こと(と)を(と)する」と英訳している。Cf. D. Breazale, *Foundations of Transcendental Philosophy nova methodo* (1796/99), p.220. しかし、構造的反省の対象は感情であり、しかも「被制限性の感情」と「努力の感情」の合一体としての感情である。それゆえ、原文での diese が、変化のみを指示しているとは考えにくい。従って、本論文では diese が diese Beschränkung を指示しているとした。
- (13) 本論考では、感情と直観の関係を詳細に論じるため、感情が客観化される過程を順に説明してきた。しかし、自我の意識構造においては「被制限性の感情」「努力の感情」「もの直観」「理想の直観」が合一されている、ということは指摘しておく必要がある。「被制限性の感情、努力の感情、限定された客観の直観、理想の直観、これら四つは必然的に結合されている」(87)。
- (14) 『新方法』の感情論を理解するにあたり、次の研究に多くの示唆を与えられた。Vgl. P. Lohmann, *Der Begriff des Gefühls in der Philosophie Johann Gottlieb Fichtes*, Amsterdam 2004, S.141-158.
- (15) イエーナ期知識学における意志論の展開を理解するにあたり、次の研究に多くの示唆を与えられた。Vgl. G. Zoller, *Bestimmung zur Selbstbestimmung. Fichtes Theorie des Willens, Fichte-Studien 7* (1995), S.101-118. Zoller はこの研究に

て、フィヒテが一七九三年の『あらゆる啓示に関する批判の試み』（以下、『啓示批判』と略記）の第二版において初めて詳細な意志論を展開したことを指摘すると共に、『啓示批判』以降の意志論では理性的主体がもつ「個人的意志」と「超個人的な「純粹意志」の間の関係を規定することが主題となることを明示している（S.106f.）。

(16) 本論考では *das Wollen* という用語を翻訳する際、Breazale がそれを *act of willing* と英訳していることを考慮に入れ、「意志活動」という訳語を用いた。このように訳することによって、*das Wollen* が感性的欲求に属する働きではなく、意志の働きであることが明確になると考えられる。Cf. D. Breazale, *Foundations of Transcendental Philosophy nova methodo* (1796/99), Cornell University Press 1992, p.264.

(17) Zöllner は、『基礎』の実践的部門の欠陥と、イエーナ期知識学における「意志」の意義を次のように説明している。「とりわけ『基礎』では、衝動、憧憬、努力という実践的カテゴリーを体系的に連結する、意志という中心的な概念の導出が欠けているのであり、この中心的概念を経ではじめて、自由の基本的カテゴリーはその体系的な位置を受け取るであろう。」G. Zöllner, *Das „erste System der Freiheit“ in Fichtes neuer Darstellung der Wissenschaftslehre*. in : D. Christian, J. Stolzenberg (Hrsg.), *System und Kritik um 1800*. Hamburg 2011, S.23.

Zöllner に従えば、イエーナ期知識学における「意志」とは衝動や努力等の実践的カテゴリーを体系付けるものである。このように「衝動」と「意志」の関係を解釈することで、自我の意識構造において「意志」が「衝動」よりも一層根源的なものであることが明らかになると考えられる。